

〔調査〕 ヒュームにおける「人間の科学」と政治経済学

— ヨーロッパの研究動向 —

I 問 題

私は著書『歴史家ヒュームとその社会哲学』(1977年)で、ほとんど忘れられている歴史家ヒュームに焦点をあて、その『イギリス史』(1754—1762年)をかれの思想体系のうちに位置づけるとともに、あわせて18世紀中葉のいわゆるスコットランド歴史学派のなかでのかれの地位を明らかにすることを試みた。そして哲学から政治・経済学を経て歴史に及ぶ広大な分野にわたるヒュームの著作を貫く根本思想が、市民社会の育成と擁護にあったことを明らかにした。ところでスコットランド歴史学派の歴史研究は、歴史それ自体のために行われたのではなく、社会の歴史的認識を媒介として政治経済学を生み出す重要な契機となった点に意義がある。このばあいヒュームは最も重要である。というのはかれは歴史家であると同時にまた政治経済学者でもあったからである。本稿は前著の問題を前進させ政治経済学者ヒュームが如何なる方法で、市民社会を経済学的に分析し、如何なる結論を導き、そして市民社会を擁護したかという問題に接近するため、これまでの西ヨーロッパの研究成果がどの程度までこの問題に答えているかを批判的に概括し、展望することにある。ここで「人間の科学」というのは政治経済学の方法論を、政治経済学というはおもに『政治論集』(1752年)(Ⅲ)¹⁾にふくまれる経済論文と政治論文、およびそれに先きだつ『道徳・政治論集』(1741年)(Ⅲ)にふくまれ、その後1760年までに書かれた一群の政治論文を指している。これらの経済・政治論文は、青年期の最大の著『人性論』が、自ら『自伝』で述べているように「印刷機から死んで産まれ落ちた」(Ⅲ, p. 2)あと、週刊誌に公表することを目的として書かれた短い時論からなりたっている。そこで「人間の科学」としての方法は、はるかに後景に退いており、わずかに暗黙の前提として示唆されているにすぎない。いまこれらの再構成を試

み、ヒュームの政治経済学の構成を体系的に描いてみることは、それによってアダム・スミスの『諸国民の富』(Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, 1776)、の成立に果たしたヒュームの貢献を明らかにしようとする問題意識に根ざしている。のちにみるように、ヨーロッパのヒューム研究は未だこの段階に到達していない。しかし私は、その底流にこの問題意識を秘めていることを、18世紀の政治・経済思想の巨視的分析を行った最近の研究書の概観によって明らかにし、次いでヒュームの研究の現状をやや詳細にみることにする。

II 18世紀への巨視的把握の試み

これまで近代資本主義社会の成立・発展を問題とした研究として、経済思想史上ではマックス・ウェバー(Max Weber, *Die Protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus*, Arch f. Sozialw., Bd. 20, 1904)やトニーイの研究(Richard Henry Tawney, *Religion and the Rise of Capitalism*, 1926)が、また政治思想史の上では、第1次世界大戦の敗戦という深刻な反省のなかでヨーロッパ近代国家の在り方についての歴史的省察を行ったマイネッケの研究『近代史における国家理性の理念』(Friedrich Meinecke, *Die Idee der Staatsräson in der unseren Geschichte*, 1924)があげられるであろう。それに、19世紀の近代経済自由主義の立場からみて自由競争、自由企業と夜警国家観などの経済思想史上の評価を加えれば、おおよそその18世紀像をもつことができるであろう。それらと対比すると最近の大きな特徴は、政治と経済との関連を総体的に把握し、近代経済社会の思想史上の特質を明らかにしようとする点にみられる。ここで取り上げるポーコック[1]とハーシュマン[2]の研究は、この傾向の代表例とみなすことができるであろう。

ポーコックの大著『マキャベリー的モメント—フロレンスの政治思想と大西洋岸の共和国の伝統』(1975年)[1]は、近代イギリスおよびアメリカの共和主義的政治思想の主要な根源を、ルネッサンス・イタリーのフロー

1) 本稿でとりあつかう主要文献は、ヒュームの著作を除き、「関係文献」の形に一括して末尾に掲げ、それに一貫番号を付し、本文や注ではこの番号によって、それらの文献をあらわすことにする。

レンスの市民的ヒューマニズムの思想家たち、とりわけマキアベリーに求め、それを起点として17世紀中葉の革命過程にあったイギリスへの移植、マキアベリーの思想を継承したジェイムズ・ハリントンおよび18世紀の新ハリントン主義から、アメリカ共和国の誕生を助けたアダムズ、ジェファソン、メディソンおよびその協力者たちへのその広汎な影響をあとづけることにある。マキアベリーの政治思想の特徴は、ポーコックによれば、その市民的ヒューマニズム、すなわち市民の広汎な政治的参加とそれを支える市民的徳の概念を新しく確立したことである。マキアベリーは16世紀はじめの都市国家としてのフローレンスを外敵と内部の混乱という二重の障害から守るために、古代ローマの歴史から学んで、征服によって拡大する共和国を構想した。それは征服の手段をもたなければならず、その手段は、訓練された、勇猛な兵士たちであった。共和国のために戦い、かつ死する大量の兵士は、国家に利害関係をもつ市民から徴集されなければならない。かかる武器をもつ市民兵とその政治過程における積極的参加によって共和国が構成され、その権限と官職とを市民の各層に適宜配分することによって、その内部混乱を防止することが計られた。共和国の危機は、軍事的勇氣の衰退であり、そしてその衰退は腐敗から起る。腐敗は、公共の善より私的な善または階級的な善を追求することから起る。事実、ローマの崩壊は総督や護民官階級の自己追求および権力追求から起った。また市民兵士が柔弱となり、耐乏と戦闘より、自己の安楽と享楽を選ぶことによって起る。注意深いマキアベリーは、結論的にいう。ローマのように他の共和国を破壊する征服を目的とする共和国は、軍事的敗北とそれ自身の腐敗によって崩壊する、と。マキアベリーによって明らかにされたこのフローレンス共和主義思想の核心、共和的自由の唯一の安定的基礎は、武器をもつ市民兵の軍事的徳にあること、人は、その全人間性を政治的過程における積極的参加によってのみ発揮できるという考えは、英・米の政治思想の主要な伝統となった。

このマキアベリーの思想は、17世紀中葉の革命期のイギリスへ移植され、ジェイムズ・ハリントンの『オシアナ』(James Harrington, *The Commonwealth of Oceana*, 1656)に具体化された。ハリントンは、ポーコックによれば、「市民的ヒューマニストの思想とイギリスの政治的・社会的意識とを、いいかえればマキアベリーの武器の理論と財産の自由保有の重要性のコモン・ローの理解とを総合した人物である」(p. viii)。ハリントンは近代社会の初めに旌生した自由なヨーマンリに、マキアベリーの

主張する市民的共和国の基礎をみだし、それをイギリスにおいて実現する現実的な条件が生まれたとみたのであった。しかしこの時代のイギリスは、ハリントンが前提とした農業社会から商業社会へと転化しはじめた。そして商業の発達は、市民的徳の完成に大きな脅威となった。18世紀においてポリングブロックを頂点とする新ハリントン主義者とよばれる一群の思想家は、ハリントンの思想を継承して、商業社会化が齎らした市民の政治的徳の腐敗とそれにもとづく政治体制の危機を訴える「在野」のイデオログを形成し、近代化を推進する政権の座を占めていたウォルポールを首班とする「宮廷派」のModern Whigと対立したのであった。かれらによれば、市民的徳の腐敗とそれにもとづく政治的危機の根源は、名誉革命以来急速に発達した銀行・金融制度を中心とする経済秩序と経済力を政治に利用したウォルポール政権にある。自由を破壊するものは、もはや国王の大権ではなく、貨幣の力である。というのは革命以後制度化された国債、基金、高額の租税は、官僚をふやし、常備軍を増強し、国王への従属者をふやしたばかりでなく、これらの国家収入をてことし、官職と選挙を統制することによって議会を買収する財政権力は、立法府を事実上行政府に従属させ、国の基本的政治体制である議会の独立、とりわけその自由を破壊する危険を招いている。ポリングブロックは、現政権のこの権力の増大には専政主義のおそれがあると批判し、議会の独立・選挙の自由を強調し、そして貨幣の力が風俗にまで及び、奢侈の風潮が国民の道徳を腐敗させるに任せている政府の無策をなげいている。そしてこれらの腐敗から、独立的なジェントリーを守り、かれらによって議会の独立を守ることこそが、伝統的な共和的政治体制を維持する道であった。

一方、ウォルポール陣営は、名誉革命以来の経済的变化を、ポリングブロックとは反対に全面的に肯定し、自らの政権と政策とが名誉革命のとりきめ、その思想的基礎としてのジョン・ロックの思想の全面的実現であるとし、それが革命で確立された政治体制の最も忠実な具現であると、自らを擁護しているのである。このModern Whigとポリングブロックとの間には、激烈な政治・経済論争をひきおこした。この論争および広く商業社会化の諸現象に刺げきをうけ、モンテスキューを祖とするスコットランド歴史学派が成立した。かれらは、広くModern Whigの立場にたつが、もっと根本的な立場から、近代商業社会の思想的根拠を明らかにすることに努めた、とこれまではその思想史的地位を与えてられていた。ポーコックはこのような解釈と異なり、かれらが商業社会

擁護の側面と、ボリングブロッックらのもつ伝統的な新ハリントン主義者の思想をあわせもつこと、商業社会擁護と批判との二面性格、ポーコックの表現によれば、「悲劇的矛盾の感覚(a sense of tragical contradiction)」(p. 504)をもっていることを強調し、その視角からこれらの思想家の特徴を捉え、その微妙な性格を提示していることである。ポーコックによれば、スコットランド歴史学派の祖であるモンテスキューの政治思想は「矛盾にみちた壮大な試み」(p. 485)として位置づけられる。モンテスキューはこの視角からすればこの科学の最大の実践者であった。かれは一方ではすぐれた政治的資質の養成に関心をもつ古典的ルネッサンスの伝統の最後の巨大な擁護者としてみられているが、他方では、「近代」の側になって商業と結びついた社会における変化が自由の新たなプランと古代的意味における徳に代わるものの基礎を提供できることを認識した第一人者としてみることができ。しかしかれの悲劇は商業が最終的には古代の徳に代わることができないことを認識していたところにある。商業の発展ははじめは人間を啓蒙し、温和にすること、そして諸国民の間に平和を齎らすことを強調した。しかし究極的には、商業に伴う奢侈が、法、教育および習俗を腐敗させることを承認している。中間的展望においてモンテスキューは商業と技芸が人間の社会性と、さらに進んでそれが政治的自由と市民的徳とへの寄与が認められるに過ぎず、根本的な矛盾は『法の精神』のなかにそのまま残っている、と解釈される。この二重性をモンテスキューとともに共有していたヒュームのなかにも、モンテスキューと同じ展望がみいだされるのは不思議ではない。かれもまた商業が欲望を育てはぐくむことによって人間の精神を解放する力をもつものとして受け入れたが、しかしかれは商業社会が、それが腐敗することを究極的に阻止する力をもっていないということをあわせ認識していた。権威と自由、土地財産と動的財産の間にみられるかれの二重性はこのことを物語っている。マキャベリーの伝統は、アダム・スミスのなかにもみられる。スミスが分業による専門化が腐敗の主要原因であることを明らかにしたのは、このことの証拠である。この学派のなかで最もマキャベリー的であるのは、アダム・フーガソンである。かれは分業による商品の生産と多様化を目的とする社会は、道徳的政治的に自律的に選択する個人から成る社会とは敵対的であり、文明化はこの矛盾、分業はマキャベリーのいう人格の道徳的基礎をますます蚕食するものとしてあらわれてくるということ、最も鮮明にしたのであった。

このポーコックの研究は、これまでのスコットランド歴史学派に対して与えられた自由な資本主義社会の歴史上最初思想史的展望の提出者としての地位に疑問を投げけるものであるが、ポーコックの研究と並ぶもう1つのハーシュマンの研究『情念と利益——勝利をおさめる前までの資本主義に賛成する政治的議論』[2]は、時代を17・18世紀に限り、主題も商業社会を擁護する諸理論の交錯する発展を、イギリス、ヨーロッパ大陸およびアメリカにわたってあとづけ、むしろスコットランド歴史学派の功績を一貫して商業社会擁護の理念としてあとづけ、広く政治理論との関連を示唆した点で、ポーコックと対蹠的でさえある。ハーシュマンもまたポーコックと同じく思想史的な接近方法をとっているが、しかしかれは、この時代の個々の思想家についての厳密な資料考証ばかりでなく、それらについての最近の研究および広くこの時代の政治・経済思想についての研究動向との関係を顧慮することなく、むしろ自己の解釈を率直に提示している。そのため厳密さに欠ける欠点はあるが、しかしかれの主張がきわめて明確に示している。かれの関心は、17・18世紀の世界において資本主義を「正当化」する議論、すなわち以前は罪深いもの、破壊的・分裂的であったものとして考察された物質的動機と野心とを道徳化し、文明化し、うけいれやすい理論が生まれてきたことの考察に向っている。かれの主要命題は、資本主義に賛成のための議論は、一方では被統治者に物質的追求に関心をもたせることによってかれらの情念を抑制し、他方統治者の側には、恣意的または利己的な国王の干渉を排除して人民の物質的追求とその活動の結果である経済組織を監督させる任務を新しく課することによって、かれらの情念をも抑制するという現実的な提案に根ざしていることを明らかにすることにある。

第1部でハーシュマンは近代初期の政治思想家、マキャベリー、ホッブス、あるいはヴィコフが空想的または観念的な人間の本性に向うよりも「現実にあるがままの人間」に向うやいなや、「かの道徳化を目指す哲学や宗教的勧告も、もはや、人間の破壊的情念を抑制するという負託に耐えられなくなり」(p. 15)、情念を抑制するさまざまな手段を示唆したことが、この問題の発端であると述べ、そのなかでかれは「対抗情念の教義(the doctrine of countervailing passion)」とよばれるものを特別に強調して選びだしている。利益(interest)とよばれる情念が個人のなかで、他の破壊的・分裂的情念に対抗し、打ち勝ち、支配するようになれば、個人は生活目標を真剣に制定し、それを規則正しく追求する形で行

動する。「情念を馴致する最も重要な利益は、金儲けに関連するものであり、それは野心や権力欲やまた色情のような他の情念に有用に対抗し、抑制することができる」(p.41)。このように個人の物質的利益の追求は不当な・破壊的な情念を抑制するから、商業は、「無害」、「優雅」かつ「穏和」とであるとみられる。金儲けは、名誉と栄光を求める貴族的情念よりも、その効果において穏やかである。さらに物質的な私利追求の個人からなる社会は行動において予想されやすく、変化が全くない。資本主義の精神は、すべての人間のほかの情念を抑制する仕方としてはじまったのである。18世紀において、ヒュームが商業社会を擁護するに当って、率直に食欲による他の情念の抑制の意義を強調しているのは、これまでの思想の発展の帰結を示しているものに外ならない。『道徳・政治および文学論集』のなかの一論文のなかで、ヒュームは食欲について、——それを「利益」と偽装することに悩むことなく——「頑固な情念」と述べ、さらにつぎのように推敲を加えている。「食欲、すなわち利益への願望は、あらゆる時代、あらゆる場所で、すべての人々に作用する普遍的な情念である」(III, p.176)。『人性論』においてかれは「永久的」で「普遍的」だと特徴づけられる「利益愛好」を、「間において作用し、特定の人にむけられる」羨望や復讐のような他の諸情念と対照させているのは(II, pp.258 ff.)、その一例であり、そしてさらにかれの「利益の愛好が快楽の愛好より優勢になるのは、すべての勤勉な職業についてのまちがいのない結論であるという確信が生まれる」(III, pp.325-6. 邦訳『論集』77ページ)というの、これらの思想の帰結を総括している、と言ってよいであろう。

第2部でハーシュマンはこの時代の政治思想家が如何に「利益」を統治に関連させたかを論じ、本書の最も輝かしい部分をなしている。かれは個人の物質的利求とその付随物である経済的拡大が如何に支配者の情念のゆきすぎ——支配者のわがまま、人民に災危をあたえる栄光にたいする渴望——を抑制することに役立ったかを明らかにしたモンテスキューとジェイムズ・ステュアートに焦点をあてている。モンテスキューは第2部で論じられた商業の経済的・文化的影響を強調したばかりでなく、またその政治的インパクトに注目した第一人者であった。為替手形の発明と外国為替による送金制度の確立によって、商業は暴力、とくに支配者である君主たちの食欲から免れて、到るところで自らを維持することができるようになった。そして君主たちにも、大規模な・突然に行う恣意的行動に導く情念を抑制し、商業の齎らす利点を

利用して自己の利益を計ることが新しい政治の目標となったのである。「なぜならこのばあい、やたらに権力をふり廻すことは拙策だとわかり、繁栄を与えるのは良好な統治にほかならないということになったのである」(3, Book III, ch. xx. 邦訳314ページ)。このようにして君主の情念が自らの利益によって馴致されることを述べたのち、モンテスキューは、情念を対抗させるという同時代に支配的な考えに、かれ自身の権力の方立・対抗の理論と接合・融合させたのである。というのは君主の最も強力な情念である権力欲は自然で飢くことのなき欲望であり、その結果、無制限な権力の濫用を牽制する手段をみだすことが新たな政治の課題になる。かれの権力の分割と混合政体の擁護は、権力を相対抗させるための政治的関心から生まれたものである。

モンテスキューの影響を強く受けたジェイムズ・ステュアートの『経済学原理』[4]は、モンテスキューよりもっと明白かつ一般的な形で述べている。かれが近代経済を時計にたとえたことは、このことを直截に物語っている。一方では、その時計はきわめて微妙なので、手荒にあつかったりすると、たちまち壊れることになる(vol. I, p.278. 邦訳(2)226ページ)。このことは支配者の悪徳や情念から生まれる権力の濫用によっては、時計はただ動くのをやめることを意味する。他方、この同じ時計はステュアートによれば、「絶えず狂って動く、ときにはぜんまいが余りにも弱すぎたり、またときには余りにも強すぎるためである。従ってそれを正しく動かすには職工の手が必要となるのである」(vol. I, p.217, 邦訳(2)130ページ)。これによってステュアートは、新しい時代には、よき意図をもつ・微妙な干渉がしばしば必要とされることを示唆しているのである。ハーシュマンの思想史研究は、情念と利益のあいだの区別を解消し、経済的動機にすべてを包摂したスミスの『諸国民の富』をもって終っている。

以上においてスケッチされたポーロックとハーシュマンの研究は、18世紀の思想についての最近の研究動向を伝えているだけではない。広くヒュームについての問題提起に、多くの示唆と今後の研究を規定する重要な要素を提供している、とみられるであろう。

III ヒューム経済理論研究の発展

周知の如く『人性論』が再発掘されるまでは、『人性論』の3巻の改作を独立して刊行したヒュームの哲学的著作はすべて無視され、ヒュームは、その生涯においては、『政治論集』あるいは『イギリス史』の著者として

著名であり、『政治論集』についていえば、方法論が殆ど述べられていないため、その経済理論の側面のみが注目されるに止まったことは、当然すぎることであろう。この傾向は古くはマルクス、エンゲルスのヒューム批判[5, 6, 7, 8]からシュームベーターの『経済学史』(1954年)[9]に至るまで、ヒューム経済理論の否定的・積極的評価は別として共通しており、経済理論をヒュームの他の著作から切り離して独立して取り扱うことがひとつの確立された伝統となっていると言ってよいであろう。

マルクスは『経済学批判』[5]『資本論』[6]およびかれの筆になるといわれる『反デューリング論』[7]の批判的学史の章のなかで、ヒュームの貨幣論・貿易差額説を批判し、それらの理論は、ジェイコブ・ヴァンダーリントの『貨幣万能論』(1734年)[10]の後塵を追い、その敷き写しではないかと指摘し、さらにつぎのように述べている。「ヒュームは経済学の分野でもやはりひとかどの人物であるが、しかし、この分野ではけっして独創的な研究者ではなく、まして画期的な研究者などではまったくない」と評価し、さらにつけ加えてかれの論文が多くの影響を及ぼしたのは、「それらが当時イギリスで急速に勃興しつつあった資本主義社会についての進歩的=楽観的な讃美の書であったからだ」(S. 225. 邦訳250ページ)とその理由を述べている。マルクスとちがってヒュームの経済理論を高く評価するラフェル[11]、クレメ[12]、ジョンソン[13]などの研究がおおよそ今世紀50年代までの主要な傾向を代表していると言ってよいであろう。これらの研究はヒュームの経済理論を自由主義経済思想であるとみている点でみな一致している。この間、エンゲルスが『空想的社会主義と科学的社会主義』(1800年)の英訳の序文「唯物史観論」[8]のなかで、ベイコン以来、ヒュームをふくむイギリス哲学の特徴を「恥ずかしがりやの唯物論」(S. 530. 邦訳82ページ)と述べその意義を評価したり、ケインズが『雇傭・利子及び貨幣の一般理論』(1939年)[14]のなかで、経済学者ヒュームを、重商主義者の側面を残してはいるが、古典派の世界へ一方の足と他の足の半分とを入れていたスミスの直接的先駆者として扱っている一方、その処女作『蓋然論』(1926年)[15]において、自分の考えがヒュームに近いことを告白しているのはむしろ例外と言ってよいであろう。今世紀に入ってからの『人性論』の再発掘の結果は、経済学者ヒューム理解にとって2つの重要な問題を提起した。すなわち第1にヒュームの政治学経済は、『人性論』の序文のなかでヒュームによって明確に宣言された「人間の科学」の一部を形成するものであること、

従ってかれの体系の有機的な一部分として研究されなければならないこと、第2に政治経済学における方法としての「人間の科学」は、『人性論』において展開された認識論的懐疑論および『悟性論』における不可知論とは、いちぢるしく異なることが明らかとなり、政治経済学における「人間の科学」はきわめて、積極的・建設的であることがあげられ、この相異が如何に解釈さるべきかという問題が提起されたのである。これらについてはやや詳細な説明が必要であろう。

ケンブ・スミス[16]をはじめとするメッツ[17]などの『人性論』の再発見とその意義の強調は、ヒュームの著作を全体として、その目的と方法との統一的観点の下にみる可能性を切り開いたところにある。すなわちヒュームの哲学が同時代のスコットランドで勃興しつつあった道徳哲学の体系・方法と同じ地盤にたっていることを明らかにしたところにその最大の功績がある。道徳哲学は、近代社会のはじまり、すなわち経済が優越しはじめた時代において、広く社会における人間の行動の規範を探求する唯一の学問として成立した。そしてそれは、近代の自然科学的方法、ニュートン(Isaac Newton)を模範とし、科学の真の道は、「あらゆる結果を最も単純な、最少の原因から説明することである」ことを確信し、「最も基礎的な事実である人間の本性」をその要素に分解し、そこから導出された人間の本性の原理にもとづいて、政治・経済などの社会的活動における規範を探求し、そして現状をその原理から批判するものであった。「人間の本性」こそ、ヒュームによれば、すべての科学の「首都、または中心地である」。「すべての学は多かれ少かれ、人性に関係があり、外見はいかに人性から離れた学があるにせよ、それらもやはり、なにかかにかの経路を通して人性に帰ってくるのである」。この新たな「人間本性」の上に社会科学を建設することが、ヒュームの課題でもあったのである。これは数学・自然学および自然宗教にあてはまるばかりでなく、社会諸科学すなわち論理学、道徳学、文芸批評および政治学に、とくにあてはまることはいうまでもない。そして「人間本性」の基礎的事実を確定するためには、われわれの「実験」は——とヒュームはいう——「人間生活の慎重な観察からひきだされなければならない。すなわち人間を、世間に現われる経過に従って、人と交り、業務上携わり、遊び戯れる人間の行動をみななければならない」(II, pp. 309-10. 邦訳『人性論』(1) 21-26ページ)。つまり社会諸科学は理論的かつ歴史的でなければならないのである。『人性論』の再発見は、ヒュームの経済論、政治論の展開が、

発表の形式は変わったとはいえ、かれの本来の計画の一部の実現であること、その体系の内部に位置づけられるべきことを明らかにした。ケンプ・スミスをその代表とする『人性論』の研究は、ヒュームにおける情念論、道徳感説にあらわれた自然主義を高く評価し、合理主義的認識論に対するヒュームの認識懐疑論をかれの哲学の非本質的部分として扱ったのである。ケンプ・スミスを継承するメッツもまた『政治論集』をもヒュームの哲学体系の一部として包摂しようとしているが、ヒュームの哲学体系のなかに二元論をみとめ、認識論的懐疑論と実践哲学との間には架橋できない対立があり、後者の基礎にある自然主義こそ、ヒューム哲学の本質である、と規定しているのである。

このような哲学者ヒューム研究の側からする問題提起に経済学者ヒュームの研究者は依然として答えていない。シュームペーターはその『経済分析の歴史』(1954年)のなかで国際経済の自動調節機構の分析についてのヒュームの業績をマルクスとは反対に極めて高く評価しているけれども、「人間の科学」との関係を全く否定している。「ヒュームの経済学は、かれの心理学にも、またかれの哲学にもなんの関係ももたない」(p.448. 邦訳[3]945ページ)と。1955年に、ヒュームの『経済論集』[18]を刊行し、その「序言」のなかでヒュームの経済学がかれの哲学の全体的骨組みのなかでみられるべきことを強調した Rowtwein も、その後20年を経た現在『ヒューム死没200年の記念論集』[19]のなかで、同じ主張を繰り返すのに止まっているし、「序言」のなかで問題されたヒュームの経済活動の分析が Lyon [20] Lofthouse [21] などによってとりあげられているのが現状である。ヒューム経済学のスミスへの影響をあとづけた W. L. Taylor [22] も、「人間の科学」に全く関心を払っていない。

他方、ヒュームの政治論文は、これまた孤立的に取り扱われ、最初は自然法批判者としてのヒュームが、最近では Duncan Forbes の『ヒュームの哲学的政治学』(1975年)[23]のなかではじめてヒュームの政治思想の積極的側面が注目された。かれはヒュームの、懐疑的あるいは科学的ウィッグ主義をスミスと共通する政治思想であることを明らかにしているが、残念なことに、経済学者ヒュームは視野のなかに入っていないのである。またヒュームの全著作の方法的発展を問題にした Noxon [24] は、『人性論』で「実験心理学者であったヒュームは、その後の著作において哲学的歴史家へ変身した」(p.25)。『政治論集』は、「大部分、人間の歴史の意味を反省的に調べることによって得られた心理的洞察に負つて

いる」(p.191)とされ、Noxon においては、哲学的歴史家の著作とされているのである。Johannes Rohbek の『利己心と同感——ヒュームの社会認識理論』(1978年)[25]は、これまでの研究にみられるように、政治経済学者ヒューム研究の貧困な現状のなかで、はじめてヒュームの全哲学体系のなかで経済学をふくめて、その理論と方法をあとづけた唯一の研究である。Rohbek は、経済学の方法と理論とを社会の自律性の上に築かれた自由主義的経済理論とみ、その方法を情念を中心とする「人間の科学」の唯物論的側面の表現である、としている。これに対して『人性論』における認識論的懐疑論、および『人間悟性論』(IV)と『自然宗教に関する対話』(IV)において一層発展した不可知論との関係を問題とし、ヒューム哲学研究の成果を継承して、これをデュアリズムと解釈し、前者がヒュームの基調である自然主義をあらわしている、としている。Rohbek 研究の新しさは、むしろ『人性論』における認識論的懐疑論の根拠を、ヒュームの社会理論に求めているところにある。それはさておき、Rohbek はヒュームの経済学を自らの問題にはじめてとり入れながら、かれの政治学には注目していない。このように、そのアプローチととりあつかう問題を異にしている現状では、個々の研究に即してその成果を明らかにしてゆく方法も考えられようが、ここでは、われわれの問題意識に最も近い Rohbek の研究をとりあげ、それに集中することによって「人間の科学」と政治経済学との関係の問題性とその問題領域についての概観を得ることにしたい。

IV ヒューム経済理論の基本構造と「人間の科学」

ヒューム『政治論集』はアダム・スミスの『諸国民の富』の刊行に先きだつ20有余年前において近代市民社会の経済構造を総体的に把握し、古典的政治経済学への道を準備したのであった。ヒュームはそのなかで新たな「人間の科学」という観点から近代社会の成立の経済的意義を歴史的にあとづけ、重商主義解体期の経済学を体系化することができた。

ヒュームは近代社会を農工分離にもとづく近代的生産力の展開過程から把握している。まず農業生産力が発達するにともなって、農業と工業とが分離し、この社会的分業を媒介として人類は未開社会から脱して市民社会を形成する。この経済発展を推進するものは、ひとつには、社会の個々の成員の欲求を解放して商品経済をおしひろげること、ヒュームの用語を以てすれば奢侈や利潤欲の解放である。もう1つには、勤勞(industry)や技芸

であり、それによって社会の生産力が増大するのである。このようにして発展する近代社会、すなわち、「奢侈や商工業を育成するところでは、農民は土地の適切な耕作で富裕になって独立する。一方商工業者は財産のわけまえを獲得し、社会の自由の最もすぐれた最も強固な基礎である、あの中産階級に権威と尊敬をもたらす」(Ⅲ, p. 306. 邦訳『論集』41ページ)。このような政治的変革をもたらす近代社会の生産力の展開は、農工の分離にもとづく社会的分業と交換を通じて実現される。ヒュームは、外国貿易から相対的に独立した国内の商工業の発達に重心を移して、国内の単純商品流通における商品生産者の相互の利益を重要視する。商工業の確立したイギリスにおいては、外国貿易はもはや従属的な地位しか占めない。イギリスの現状に關してヒュームはいう。「なるほどイギリス人は貨幣の豊富の結果だけではなく、一部は職人の富裕の結果でもある労働の高価格によって外国貿易において多少の不利を感じている。しかし外国貿易は最も重要なことだからでないから、それは幾百万人という人々の幸福と競合させるべきでない」(Ⅲ, p. 297. 邦訳『論集』25ページ)。そしてこの商品の国内流通においては貨幣は、交換の一般的尺度となり、もはや金銀という素材を重視する見方は捨てられる。「正確に云えば、商業の実体の一つではなくて財貨相互の交換を容易にするために人々が承認した道具にしかすぎない。それは交換の車輪の一つではない」(Ⅲ, p. 309. 邦訳『論集』48ページ)。従って、「われわれは貨幣量がより大であるか、より小であるかは一国の国内の幸福に關しては少しも問題ではない、と結論することができよう」(Ⅲ, p. 297. 邦訳『論集』25ページ)。それは物価の騰落をもたらすだけであるという機械的貨幣数量説が生まれる。すなわち一国の商品価格は、流通する貨幣量によって規定され、商品が増加すればその価格は下落し、貨幣が減少すれば逆に商品価格は騰貴する。

ヒュームはこの機械的貨幣数量説と国内の単純商品流通のもたらす利益とを、外国との貿易関係に移し、重商主義政策を批判し、自由貿易論を主張することとなる。機械的貨幣数量説は、外国貿易にも拡大され、貨幣量が多ければ物価が騰貴し外国から安価な商品が流入して貨幣が流出する。国内で工業が確立しているかぎり、商品価格の下落は対外競争力を増し、輸出が増大し、やがて各国の貨幣量は商品量に見合うようになるという貨幣量の自動的調節機構論が成立することになる。ヒュームはいう。「もしイギリスの貨幣の総量の5分の4が一夜のうちになくなり、国民が正金についてヘンリー諸王やエ

ドワード諸王の時代と同じ状態に戻ったとすれば、結果はどうなるであろうか。すべての労働と財貨との価格がこれに応じて低落し、すべてのものが、これらの時代と同じように安く売られることはたしかではなからうか。こうなればどんな国民も、あらゆる外国市場でわれわれと争うことができず、またわれわれには十分な利益となる価格で工業製品を輸出したり販売したりすることはできないであろう。だからきわめて短期間のうちに、この事情はきっと、わが失った貨幣を呼び戻し、わが国の労働と財貨との価格を近隣のすべての国民の水準にまで騰貴させるであろう。われわれがこの点に達したのちには、労働と財貨との廉価という利点は直ちに失われる。そして、これ以上の貨幣の流入は、わが国の飽和状態によって止められるのである」(Ⅲ, p. 333. 邦訳『論集』90-1ページ)。このように外国貿易による貨幣総量の変化にもかかわらず、それは水のように一定の水準を保つのであって、「隣接するあらゆる国民のあいだで貨幣をたえず国民の技術と産業活動とにほぼ比例するように保持するにちがいない」(同上)のである。

この地金の国際移動による自動調節的作用からみれば、当時の貿易差額論にたつ経済政策は批判されざるをえない。この見地から貿易差額のプラスの確保が必要であるとする重商主義のドグマは無意味であるばかりか、実行不可能である。またこのドグマによって貨幣の輸出を禁止したり、「いづれの国も近隣の諸国民を犠牲とせずには繁栄しえない」(Ⅲ, p. 345. 邦訳『論集』113ページ)とする「嫉妬」によって国内および外国の需要をみだすことのできる穀物を輸出禁止することは誤りといわざるをえない。むしろ他の諸国において自然的優位さによって生産された財貨を購入することはこれらの国を繁栄させるであろうが、同時にその繁栄は、これらの国をしてグレート・ブリテンのような国の生産物を購買することを可能とする。国際貿易の拡大はそれに関係するすべての国において製造工業と貿易とをふやし、すべての国が相互により顧客となることを可能とする。さらにこの拡大は人々に、地球上のあらゆる恵みを使い、享受させる。このような交易を拒否することは、自然に逆うことである。

貿易差額論を批判して、地金の国際的移動による自動調節作用を強調するヒュームは、新しく国際分業の思想を媒介として自由貿易を主張するに至る。1758年の『政治論集』につけ加えられた「貿易上の嫉妬について」と題する小論文のなかでそのことを明確に述べている。「自然は——とヒュームはいう——相異なる天分や気候

や土壌をそれぞれの国民に与えることによって、それら国民がすべて勤労と文明を重んずる限り、かれら相互の交通と商業とを保証している。いやどこの国においても、技術が進歩すればするほど産業の盛んな近隣の諸国民への需要はますます多くなるものだ。住民が富裕になり、熟練をもつようになると、どんな財貨でも最高の出来のものがほしくなる。それにそういう住民は、交換に与える財貨を豊富にもっているから、どの外国からもたくさん輸入する。こうして輸入元の諸国民の産業活動が刺げきされる。一方その住民じたいの産業活動もまた、交換による財貨の販売によって発達する」(III, pp. 345-6, 邦訳『論集』113-5ページ)。従って自由貿易による「ある一国民の富と商業との増大は、その近隣の諸国民の富と商業とをそこなわないどころか、それらを促進する」(III, p. 347. 邦訳『論集』112ページ)ようになるのである。そこでヒュームは自らの自由貿易の主張の結論としている。「それゆえ、私は人類のひとりとしては無論のこと、イギリス臣民のひとりとしても、ドイツ、スペイン、イタリー、それにフランスさきの商業の繁栄を願っているのだ。少なくともわたくしの確信するところでは、グレート・ブリテンと右のすべての諸国民の主権者や大臣が、おたがいに、このような寛大で博愛的な考えを採り入れるならば、これらすべての国民はもっと繁栄するはずである」(III, p. 348. 邦訳『論集』119ページ)。貿易の相互性と一般の利益についてのこの把握は、生産と消費とが経済にとって本質的であるという把握に依拠している。社会の成員は、他人の生産物を享受するために商品を生産する。「社会のさまざまな構成員の富は、わたくしがどのような職業についてようと、わたくしの富の増大に寄与する。かれらは、わたくしの勤労の生産物を消費し、その代りにかれらの生産物をわたくしに与えるのである」(III, p. 346. 邦訳『論集』115ページ)。

もとよりヒュームの経済理論はこれに尽きるものではなく、利子、公債などに亘っているが、ここでは、経済の総体把握が正金の自働調節機構を媒介として生産から消費に至る経済の全の全過程に合法則性が支配すること、従って私的利益の間に相互補完的な均衡が成立することを明らかにしたことがヒュームの経済理論の大きな特徴であることを指摘するだけで充分である。

このようにヒュームが流通の領域を孤立的に取り扱うことをやめ、生産から流通を経て消費に至る過程をみることでできたのは、この全体的観点にたっていたからである。Rohbekに新しいことは、ヒュームの経済論の基礎に、「人間の科学」があり、それがこのような経済の

全体的把握を可能にしていることを指摘していることである。もとよりヒュームの独創になるとは言い難いけれどもかれは経済を推進するものは、人間の欲望にあり、それが生産と交換とを刺げきし、貨幣を流通させることを明らかにした。かれは人間の欲望の多様性から、商品交換と貨幣流通を導く社会的・国際的分業を導こうとしている(III, p. 346. 邦訳『論集』114ページ)。こうした観点にたつて Rohbek はヒュームが重商主義から継承した貨幣に経済の車輪の役割を与えたいわゆる連続貨幣数量説を批判する。この説は16世紀以来アメリカからの貴金属の流入が単に物価騰貴を生んだだけでなく、インダストリーの発展に大きな刺げきを与えた事実をふまえて、貨幣はインダストリーを「活気づける」作用をもつとした考えである。Rohbek は、ヒュームがこれを認めているのは貨幣が流通の全過程に浸透する「中間期」のみであり、またそれは貨幣を一般的交換手段と考え、貨幣になんらの推進的役割を与えなかった全体把握と矛盾するとして、ヒュームの経済理論に加えていない。

さてヒュームの経済論が社会の自己調節の客観的可能性の証明、すなわち社会が自己調節機能をもち、私的利益が調和的に補足し合う経済的メカニズムを明らかにしたとすれば、「人間の科学」は、どのような人間の行動がこのようなメカニズムを生み出すことができるのか、あるいはまた、そのようなメカニズムを支えるためにどのような人間の行動が必要とされるのか、を解決しなければならない。この課題はヒュームにおいては「道徳哲学」のなかで遂行される。道徳哲学には人間の行動に干渉する国家、宗教の排除をふくむ広い課題が負わされているけれども、その中心の問題は、新たな商業社会における人間の行動規範如何という問題にあると言っても過言ではない。商業社会のなかで私的生産者の行動・動機の核心をなすものは、欲望、すなわち食欲である。しかしそれが端的にそのまま発揮されれば、利害の衝突をきたし、絶えざる不法と侵害の源泉となる。「われわれ自身やわれわれに極めて近い友だちのために物財や財物を獲得しようとするこの食欲だけが倦くことを知らなく、恒久的かつ普遍的で、社会を端的に破壊する」(II, p. 264. 邦訳『人性論』(4)65ページ)。従ってこの利己心、すなわち私的利益の衝突を回避し、社会的な利害の対立のバランスを保つためには、各私的生産者のなかに、同感(sympathy)という追加的能力が内蔵されていなければならない。ヒュームはこの利己心と並んで、それと同じく根源的で、利己心に対立して働く感情移入能力である同感によって私的生産者は国家の直接的な監督や宗教の

干渉をうけることなく、それぞれの私有財産を相互に尊重する黙約を結び、交換を容易にする正義の法を樹立するに至る。そしてこの同感、社会的行動の在り方を固定化する道徳的規準の成立と一般化の役割を果すことになる。Rohbekによれば、この点に先ずヒューム道徳哲学の獨創性がある。「この理論はそれが人間の私的利益から出発するために、これまでの道徳哲学よりより現実的である。それは、また17世紀の契約理論よりもまた現実的である。というのは法廷とみられる社会は、個々に孤立した個人の能力を超えて、それ自身の特殊な作用諸力をもっている。そこに社会学的分析の萌芽をふくむヒューム道徳哲学の獨創性がある」(S. 117)。しかしここから、ヒューム道徳哲学とニュートンの自然科学的方法との関連およびヒュームの問題と地位についての困難がはじまる。ニュートンの自然科学的方法は道徳哲学の分野において神の意思の支配に従うことを教える Samuel Clarke の合理主義的道徳論を生みだしていたからである。ニュートンは『プリンキピア』において重力が生ずる理由やその終局的原因を論議することなく、重力とその効果の観察事実を計算する基礎となる数学的法則を明らかにしたのであったが、合理主義的道徳論は、この終局的原因に神をおき、事物間の諸関係から理性的な道徳哲学を説いたのであった。これに対してヒュームは、「自然の必然的作用関連を、その内在的物質的諸力に従って合法的に運動することを経験的に明らかにした」(S. 156) ニュートンに従い、人間の感情的基礎の上に社会の自律的な運動法則を明らかにしたこと、そして自らの方法を「経験」の範囲内にきぎったこと、そこにかれの獨創性があることが認められなければならない。

しかし一方ヒュームは、情念・動機理論においてホッブス以来のイギリス唯物論の伝統を継承したがこの理論が、利己主義に次いで、利他主義、すなわち同感を基礎づけようとまったく相対立する目的を目指したため、一貫して発展させることができなかった。ヒュームにおいても利己的感情は、それが欲望とこの欲望をみたすことができる対象との関係から導かれるかぎり、合理的に規定される。これに対して同感、同じ原理で基礎づけることはできない。「同感、ある対象を所有する人物を媒介として観察者に利益を期待させる外的な対象によってひき起されず、仲間と全社会の幸福の願望のなかにのみ成立する。……同感がなんら対象をもたず、この感情の方向を知らせる欲望をも与えない。ヒュームの道徳哲学の同感および直接的な社会感情には、それに対応する衝動の実体が欠けている。ヒュームがその情念論におい

て、対象をふくむ欲求から情念から導きだしたが、同感とは因果性の合理的シエマから閉め出されているのである」(S. 146)。Rohbekの研究の最大の功績はここにヒュームの懐疑論の意義をみていることである。すなわちヒュームが同感の起源を明らかにすることを放棄したことのなかに、懐疑論の原因をみている。ヒュームの懐疑論は一貫してその科学性を貫徹できなかったみずからの道徳哲学の正当化のために利用されたのである。「この二重の機能、すなわち神学的解釈から独立した道徳哲学を可能にし、同時にまた道徳哲学を認識論的に正当化しようとするこの二重の機能から、ヒュームの不可知論は理解されるのである」(S. 203)。

そうであるとすれば、このヒュームの懐疑論は、みずからの科学を破壊し、経験科学は不可能となるであろう。人間の認識能力に懐疑を投げたヒュームはまたそれからの脱出の道をも明らかにしている。

V 人間の科学の基礎としての習慣

ヒュームの認識論的懐疑論が成立するとすれば、経済の総過程、いな社会生活の合法則性を支える主体の側の要因はなんであろうか。この点において Rohbek はなんら新しいものを提供しているわけではなく、ケンプ・スミスおよびメツの到達した地点に立ち戻っているが、ここでは全体の問題を総括する意味においてとりまとめておこう。

ヒュームにおいて人間の認識能力は、道徳的判断能力と同じく自然的基礎の上におかれる。このばあい一種の本能が基礎にあって、その働きが人間の感情として内的に知覚される。道徳的評価が道徳感情に依存するように、経験的推論を構成する信念は、感情であるといわれる(IV, p. 40. 邦訳『悟性論』82ページ)。そして道徳感情が実践的行為の推進力と密接に関連し、また一定の条件下ではそれと同じであるということから、認識を、実践に働く感情に還元した。「自然はわれわれの四肢を動かすもとをなす筋肉や神経についての知識をわれわれに与えずに、それらの用い方をわれわれに教えていると同様に、自然はわれわれのうちの一つの本能を植えてくれる。この本能によって思想は、自然が外的対象の間に確立したものとあい対応する過程をとって進行せしめられている(IV, pp. 46 ff. 邦訳『悟性論』98ページ)。

このようにしてヒュームは人間のあらゆる活動を、その実践的行為も、またその知覚も思维も、「外的」・「内的」行為も、現象を分析して共通の推進力に還元することを試みた。この源泉から機械的行為と思维とを支配す

る原理として習慣を導いている。習慣は、経済、政治および道徳の基礎であり、また認識能力の基礎である。これが、方法的にニュートンの物理学に方向づけられ、あらゆる道徳哲学および認識論を包括する「人間の科学」のプログラムの真の意味である、と Rohbek はいう (S. 209)。

この人間科学の対象となる「習慣的生活」においては、人間はなんら懐疑的な思惟や行動を行わないで、あたかも絶対確実性が存在するかのように振舞う。——ヒュームはいう、かれの懐疑的哲学は日常経験にけっして影響しないし、科学をけっして破壊するものではない、と (IV, p. 6. 邦訳『悟性論』7-8 ページ)。ここにヒューム哲学のデュアリズムがあらわれる。ヒュームは、一方では、生活実践の理論——政治経済学、政治理論および道徳哲学の部門がそれに属する——を發展させた。他方では認識論的不可知論は実践から切りはなされ、純粋理論の領域へ放置されることになった。この2つの側面を全く切断することがヒューム哲学の正しい理解になるのか、あるいはこの2つの側面は相互に制約的なものと理解すべきなのか、Rohbek の研究は、ヒュームにおける「人間の科学」と政治経済学の関係を理解するためには、ヒューム哲学全体との関連のなかで考察しなければならない、という問題提起をしたことに、大きな意義を認めなければならない。

大野 精三郎

(一橋大学経済研究所)

関係文献

関係文献の範囲は筆著が言及したものに限られ、必ずしも問題についてのすべて文献を網羅することを意図していない。悉皆調査としては、2つの文献目録、Jesop, T. E.: *A Bibliography of David Hume and Scottish Philosophy from Francis Hutcheson to Lord Balfour*, New York, 1938, Reissued 1966. Hall, R.: *Fifty Years of Hume Scholarship; A Bibliographical Guide*, Edinburgh, 1978 がある。また参照の便宜のため文献は原則として本文にあらわれる順序に従って配列してある。

I ヒューム

ヒュームの著作からの引用はすべて『ヒューム哲学著作集』(*The Philosophical Works of David Hume*, ed. by Thomas Hill Green and Thomas Hodge Grose, 4 Vols., London 1874-75, Reprint 1964 による。理解に便宜のため、全巻の目次掲げる。

Vol. I: *A Treatise on Human Nature*, Book I: *Of the Understanding*, pp. 301-554, Appendix pp. 555-560.

Vol. II: *A Treatise on Human Nature*, Book II: *Of the Passions*, pp. 73-228, Book III: *Of Morals*, pp. 229-374. *Dialogues concerning Natural Religion*, pp. 375

-468.

Vol. III: *Essays Moral, Political, and Literary*, Part I & II.

Vol. IV: *An Enquiry concerning Human Understanding*, pp. 1-136. *A Dissertations on the Passions*, pp. 137-166. *An Enquiry concerning the Principles of Morals*, pp. 167-288. *A Dialogue*, pp. 289-306. *The Natural History of Religion*, pp. 307-364. *Essays Withdrawn*, pp. 365-396. *Unpublished Essays*, pp. 397-424. *Varia*, pp. 425-464.

『著作集』はさらにヒュームにたいするグリーンの有名な批判的序論(認識論については I, pp. 1-300, 道徳論については, II, pp. 1-72)とグリーンによる優れた版次の歴史(III, pp. 15-86)および短文のヒュームの自伝(III, pp. 1-8)およびヒュームの死についてのアダム・スミスの手紙(III, pp. 9-14)をふくんでいる。

ヒュームの著作には次のような邦訳がある。大槻春彦訳『人性論』1-4(岩波文庫)1948-52。『政治論集』のうち経済的論文については田中敏弘訳『経済論集』(東京大学出版会)1967が、政治的論文については未完成ではあるが、小松茂夫訳『市民の国について』(岩波文庫)1952がある。『道徳原理研究』については松村文二郎・弘瀬潔訳『道徳原理の研究』(春秋社)1949が、『人間悟性研究』については福鎌達夫訳『人間悟性の研究』(彰考書院)がある。また、宗教的諸論稿については、福鎌忠恕・斉藤繁雄訳『宗教の自然史』(法政大学出版局)1972と同訳『自然宗教に関する対話』(同)1975がある。

私は本稿において次の省略法、すなわちグリーン・グロス版の巻数をローマ数字で、例えば I, p. 427. と省略することし、邦訳もまた併記することとした。

II その他および論文

[1] Pocock, J. G. A.: *The Machiavellian Moment: Florentine Political Thought and the Atlantic Republican Tradition*, 1975.

[2] Hirschman, Albert O.: *The Passions and the Interest: Political Argument for Capitalism before Its Triumph*, 1977.

[3] Montesquieu, Charles: *Esprit des Lois*, 1748, Book III, Ch. xx(根岸団孝訳『モンテスキュー法の精神』1969)。

[4] Steuart, James: *Inquiry into the Principles of Political Oeconomy*, 1767, ed. A. S. Skinner(中野正訳『ステュアート 経済学原理(1)(2)』1967-78(未完)。

[5] Marx, K.: *Zur Kritik der Politischen Ökonomie*, *Marx Engels Werke*, Bd. 13, Berlin, 1969.

[6] —: *Das Kapital*, *Marx Engels Werke*, Bd. 25, Berlin, 1969.

[7] Engels, F.: *Anti-Dühring*, *Marx Engels Werke*, Band 20, Berlin, 1962(菅原仰・村田陽一訳『反デューリング論』マルクスエンゲルス全集, 第20巻, 1968)。

[8] Engels, F.: *Socialism, Utopian and Scientific*, 1892, *Marx Engels Werke*, Band 19, 1962(大内兵衛訳『空想より科学へ—社会主義の発展』1946)。

- [9] Schumpeter, J. A.: *History of Economic Analysis*, 1954 (東畑精一訳『シュムペーター 経済分析の歴史』(岩波書店)1-7, 1955-1962)。
- [10] Vanderlint, J.: *Money Answers all Things: or an Essay to Make Money Sufficiently Plentiful Amongst all Ranks of People, and Increase our Foreign and Domestick Trade*, 1734 (Reprint, London 1957) (浜林正夫・四元忠博訳『貨幣万能』(初期イギリス経済学古典選集第7巻)1977)。
- [11] Raffel, Friedrich: "English Freihandler vor Adam Smith," In: *Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft*, Hrsgg. V. K. Bücher, Ergänzungsheft 18, Tübingen, 1905.
- [12] Klemme, M.: *Die Volkswirtschaftlichen Anschauungen David Humes*, Jena, 1900.
- [13] Johnson, E. A. J.: *Predecessors of Adam Smith*, New York, 1937.
- [14] Keynes, J. M.: *The General Theory of Employment, Interest and Money*, London, 1939 (塩野谷九十九訳『雇傭・利子及び貨幣の一般理論』1941)。
- [15] —: *A Treatise on Probability*, 1921, in *The Collected Writings of John Maynard Keynes*, 1973.
- [16] Smith, N. Kemp.: *The Philosophy of David Hume*, 1941.
- [17] Metz, Rudolf: *David Hume, Leben und Philosophie*, 1929.
- [18] Rotwein, E., ed: *David Hume: Writings on Economics*, Edinburgh, 1955.
- [19] Rotwein, E.: "David Hume, Philosopher-Economist," in *David Hume, Many-sided Genius*, Edited and with an Introduction K. R. Merrill and R. W. Shahan, Norman, 1976.
- [20] Lyon, R.: "Notes on Hume's Philosophy of Political Economy," *J. H. I.*, pp. 31-3, 1970.
- [21] Lofthouse, S.: "David Hume and Achievement Motivation," in *Rivista internazionale*, pp. 23-4, 1976.
- [22] Taylor, W. L.: *Francis Hutcheson and David Hume as Predecessors of Adam Smith*, Durham, 1965.
- [23] Forbes, Duncan: *Hume's Philosophical Politics*, Cambridge, 1975.
- [24] Noxon, J.: *Hume's Philosophical Development, A Study of his Methods*, 1973.
- [25] Rohbeck, J.: *Egoismus und Sympathie, David Humes Gesellschafts und Erkenntnistheorie*, Frankfurt/New York, 1978.